リーダーの言葉

「綸言（りんげん）汗の如し」という格言がある。綸とは太い糸のことで、君子（天子）の言は、最初口から出たときは細くとも、だんだん太くなっていき、汗と同じでもう出てしまったものは元に戻らないということである。

最近、組織のトップたる人たちの暴言が目立つ。

「あの娘、大事なときには必ず転ぶんですよね」

ソチ五輪のフィギュアスケート女子、浅田真央選手のフリーの演技に対しての森喜朗元首相の言葉だ。森元首相は、安倍首相の要請で「東京オリンピック・パラリンピック組織委員会」のトップである会長に就任している。

NHK 会長になった籾井勝人氏も最初の記者会見で、公共放送の公正さが疑われるような発言をした。

アメリカ政府への「失望」を YouTube にまでアップした衛藤晟一首相補佐官。

アメリカの新聞に自分の歴史観を示した本田悦朗内閣官房参与。

共通しているのは、その立場にいる間はその人物が「言ってはいけないこと」が分かっていない点だ。「言ってよいこと」と「言って悪いこと」の区別がついていないのだ。自分の「立場」というものをどう考えているのだろうか。

静岡県議会２月定例会の川勝知事の発言を紹介する。

地方自治に関する知事の認識について（特別自治市について）の質問における知事答弁で、

「特例市をめざすというなら、どのくらい本気か。浜松市には、そのような本気度があるように見受けられるが、もう一つの方は腰が引けているように感じている」

「政令市のトップの意思は尊重する。やる気があるなら本当にやってごらんなさい」

「静岡市は県庁所在地であるため、美術館、体育館、運動場などほとんど県が造っている。そのためか県職員は市職員のレベルが低いという印象を持っている。そこには甘えの構造があるのではないかと思っている」

こうした発言はマスコミや新聞は報道しない。 知事の発言は「暴言」「放言」とはいえないだろうか。私はその役目にふさわしい品位と見識を持って、発言するのがトップの役割ではないかと考えている。

静岡県議会議員
天の一